

要旨

逆接の用法を持つ接続詞は、一概に逆接を表すと言っても様々なニュアンスの違いを持っており、文脈によって使い分けられる。本論では文脈の中でも特に発話者の主観的な感情に注目し、逆接助詞の使い分けについて考察した。その結果、非難を意図した文脈では、「くせに」がとりわけ現れやすく、「が・けれど」が現れることができないが、逆に、非難とは対極にあるような肯定的な文脈では「くせに」は現れず、「が・けれど」は現れることなどから、話者が発話に際してこめた感情が肯定的であるか、否定的であるか、どちらでもなく中立的であるかによって、各逆接助詞の容認性が上下することを主張する。また、話者の感情面から見た各逆接助詞のニュアンスの違いを整理する。これにより、今までほぼ同様の意味を持つとして扱われてきた「ながら」と「ながらも」、「つつ」と「つつも」の間にも、非難の文脈においては容認性の差があることがわかった。

非難の文脈と逆接助詞

言語学・応用言語学専攻 1LT03101T

平成 15 年入学 永嶋いづみ

平成 19 年 1 月提出

目次

1. はじめに	1
2. 「くせに」	1
2.1. 「くせに」の機能	1
2.2. 「くせに」と主観的感情の関わり	3
2.2.1. 主観的感情が表れていない文	3
2.2.2. 肯定的感情を含む文	3
2.2.3. 否定的感情を含む文	4
3. 「ながらも」と「ながら」	5
3.1. 「ながらも」	5
3.2. 「ながら」	6
4. 非難の「文脈」	10
5. その他の逆接助詞	12
5.1. 「が」「けれど」「けれども」	12
5.2. 「のに」「にもかかわらず」	13
5.3. 「つつ」「つつも」	14
5.4. まとめ	15
6. おわりに	16

1. はじめに

一般的に、逆接の用法が認められている接続助詞には、「が・けれど」をはじめとして、「くせに」「のに」「ながら」「つつ」「にもかかわらず」、及び、「ながらも」「けれども」「つつも」等がある。しかし、従属節と主節が逆接で結びついている文であっても、常に全ての逆接助詞が使えるわけではない。どのような文でどのような逆接助詞が使えるのかという分類については、これまでに様々な提案がなされており、たとえば、南(1993)は逆接順接とりまぜた従属句全般を、その内部構造に現れる成分、要素の範囲により分類しているし、角田(2004)はどのようなモダリティのレベルの主節と共起するかにおいて逆接表現を比較している。しかしながら、形式を離れ話者の感情、発話意図といった文脈の観点からはあまり考察が加えられていないようである。例えば「くせに」には非難・難詰の意味合いが強く、「のに」「にもかかわらず」「ながら」も同様の意味合いに用いられることがあるとされているが、常に「くせに」と他の表現との置き換えが可能であるのか、どの逆接助詞がどの程度非難の意味をもって用いられるのかということは整理されていない。また、「ながら」と「ながらも」は同一の意味を持つとされているが、非難・難詰の文脈に注目すると、差異が明らかになる。本論では、発話者の感情と、これらの逆接の接続助詞の選択との関わりについて考察していきたい。

2. 「くせに」

2.1. 「くせに」の機能

「くせ(に)」は従属節と主節が相反しているだけでなく、そこに非難や不満の気持ちを込める際に用いられる形式名詞である。その点で他の逆接助詞とは分けられ、逆接助詞に関する考察では除かれがちであるが、「くせに」の代わりに他の逆接助詞が使用可能な文脈もよくあり、「くせに」がどのような文脈に表れることができるのかを記述することは、発話者の感情と逆接表現の関わりを考える上で必要であろう。

まず、次の文は「くせに」を許容しない。

(1) ??渋谷駅の周辺は、終電間近のくせに大勢の人が行き交っている。

この許容度の低さには、第一に、「くせに」が無生物を主語にとりにくいということが大きく関わっているのではないかと考えられる。その証拠に、次の(2)を見ると、人間や動物など生物が主語である文に対し、時間帯やベンなど生物ではない概念やモノが主語である文は許容度が低い。

- (2) a. 薄給のサラリーマンのくせに、高い車に乗っている。
 b. あの家の犬は大型犬のくせに、臆病でよく吠える。
 c. ?午後二時頃というのは昼間のくせに、眠いものである。
 d. ??このペンは油性のくせに、滲む。

個人によって差はあるが、「くせに」という逆接助詞に対する主語としては、無生物や事物より生物のほうが相応しい。

しかし、生物でありさえすればいいのかというと、そうではないようである。次の(3a)は人間が主語だが違和感があり、一方で(3b)は無生物が主語だが文法的である。

- (3) a. ?人類は身体的に脆弱なくせに、繁栄している。
 b. あの会社は大手のくせに、管理態勢が甘い。

(3a)は特定の個人ではなく人類という種全体について述べていて、『人類』は全体としての人格や意志を持たない。それに対して(3b)の『会社』は、社の社風という人格、総意や方針として意志を持っていると言え、しばしば擬人的に表現される。つまり「くせに」という逆接助詞の主語は、ある程度の意志を持ち、行動の主体となりうるものでなくてはならないのではないだろうか。その証拠に、基本的に意志を持つものに対してのみ発話される(4)のような非難、禁止、否定依頼などの文では、(2)で許容しにくかった主語を含む文の許容度が更に下がる。

- (4) (cf. (2))
 a. 薄給のサラリーマンのくせに、そんな高い車に乗りやがって。
 b. 大型犬のくせに、吠えるんじゃない。
 c. *昼間のくせに、眠いのはやめて下さい。
 d. *油性のくせに、滲むなよ。

このように、平叙文において「くせに」の主語になりにくい対象は、そのまま、非難、禁止、否定依頼等の「働きかけ」の発話においても不適切となる。意志を持たないものに対して働きかけることはできないからである。非難や不満をぶつきたい対象というものは、通常、意志を持っているべきなのだ。こうした非難のしようのない無意志物を、働きかけの発話ではなく文の形は非難の意味を持っていない平叙文においても「くせに」が許容しないということは、「くせに」という逆接助詞は一般的に、単独でも非難の意図をほのめかす機能を持っているということである。ここで(1)に立ち返ると、「渋谷駅の周辺」も意志

を持ち得ない無生物である。しかし、「渋谷駅の周辺は、終電間近のくせに大勢の人が行き交っている。まったく騒がしくて雑然とした風紀の良くない街である。」というように、「渋谷駅の周辺」に対する話者の非難・不満の感情を文脈に与えれば許容しやすくなる。「くせに」という逆接助詞が許容されるかどうかは、その文の主語が意志を持っているかどうかという単純に形式的な問題でなく、「話者が主語を非難したがっている」という文脈に左右されるということである。(1)の容認性の低さは、主語が無生物であること、話者の非難の感情が含まれないことの二つによるが、結局はどちらも、「くせに」がただ単純な逆接ではなく非難・不満の主観的感情を反映する機能を持つ、という一点から生じている。

2.2. 「くせに」と主観的感情の関わり

2.2.1. 主観的感情が表れていない文

(1)は、文面からは発話者がどのような主観的感情も持っていないように思われる、客観的な状況描写文だった。そうした文のとき、「くせに」は許容されない。もっとも、「くせに」が使われるとそれだけで、話者は否定的な感情を持っているのだと予測されてしまうので、対象が意志を持たない場合のように話者が主観的感情を持ちえない文に限る。では、話者の感情が表現されている文ではどうなのか、感情を大雑把に肯定的・否定的に分けて見ていきたい。

2.2.2. 肯定的感情を含む文

典型的な肯定的感情は、プラスの評価や、嬉しい・楽しいといった感情だろう。そうした話者の感情が表された次の(5a-c)では、「くせに」を用いることはできない。

- (5) a. *日本チームはライバルである韓国に敗れたくせに、2位という好成績を残せてよく頑張った。
 b. *彼は苦学していたくせに、東大に見事合格した聡明な青年だ。
 c. ??突然のことで驚いたくせに、とても嬉しかった。

ただし、各例ともに、次の(6)に示したように、「が」は許容するので、逆接助詞そのものを許容しないというわけではない。

- (6) a. 日本チームはライバルである韓国に敗れたが、2位という好成績を残せてよく頑張った。
 b. 彼は苦学していたが、東大に見事合格した聡明な青年だ。
 c. 突然のことで驚いたが、とても嬉しかった。

(5a-c)の例から明らかのように、肯定的な評価、プラスの感情を話者が表現している文には、「くせに」は現れない。ここでいう話者の感情というのは、文全体の主旨においてであり、逆接助詞を含んだ従属節だけが否定的な内容であったとしても、主節が肯定的であれば文全体の主旨は肯定的なものとなるので、「くせに」を完全に許容することはない。ただし、次の(7)のように、従属節が否定的、主節が肯定的な文は、どちらからも肯定的な感情が読み取れる文よりは許容度が上がるようである。

(7) (cf. (5)b)

??彼は勉強を怠けてばかりいたくせに、東大に見事合格した聡明な青年だ。

このような、従属節だけを見れば「くせに」と馴染みやすい内容の文は、個人によっては許容すると思われる。

2.2.3. 否定的感情を含む文

否定的感情とは、非難をはじめとするマイナスの評価や、腹が立つ・不快だといったような感情である。否定的感情を表した文には、「くせに」は用いられやすい。

- (8) a. あの人は肝心なときに黙っていたくせに、今頃あれこれ口を出されては不愉快だ。
b. 僕も彼女を好きだと知っていたくせに、抜け駆けをするなんて彼は卑怯だ。

また、聞き手を非難しようという「働きかけ」に近い発話、禁止・否定依頼など否定的な「働きかけ」の文もある。

- (9) a. 君のほうから誘ったくせに、今さらやめようなどと何を言っているのだ。
b. 腹痛で学校を早退したくせに、どうして遊んでいるんですか。
c. 人の気持ちがわかっているくせに、じらすな。

(8), (9)では、話者ははっきりと否定的な感情を持って発話している。このとき「くせに」は許容されるが、一方で、次に示すように「が」は許容されない。

(10) (cf. (8))

- a. *あの人は肝心なときに黙っていたが、今頃あれこれ口を出されては不愉快だ。
b. *僕も彼女を好きだと知っていたが、抜け駆けをするなんて彼は卑怯だ。

(11) (cf. (9))

- a. *君のほうから誘ったが、今さらやめようなどと何を言っているのだ。
b. *腹痛で学校を早退したが、どうして遊んでいるんですか。
c. *人の気持ちがわかっているが、じらすな。

以上見てきたように、「くせに」が許容されるのは、話者が否定的な感情を持って発話していると考えられるような文脈に限る。対象が無意思物であったり、文が明らかに肯定的であったりという、通常話者が否定的感情を表しているとは受け取れない文では、「くせに」という逆接助詞は選択されない。

3. 「ながらも」と「ながら」

3.1. 「ながらも」

第2節で「くせに」との比較に「が」を用いたが、話者の感情によって許容度に違いがあったように、「くせに」以外の逆接助詞にも話者の主観的感情は影響を与える。その中で「ながらも」は、「くせに」とは反対の傾向を示す逆接助詞のひとつである。(12)はいずれも、「くせに」なら許容する文だったが、「ながらも」だと許容しない。

(12) (cf. (9))

- a. *君のほうから誘いながらも、今さらやめようなどと何を言っているのだ。
b. *腹痛で学校を早退しながらも、どうして遊んでいるんですか。
c. *あの人は肝心なときに黙っていながらも、今頃あれこれ口を出されては不愉快だ。

このように、非難・詰問の文脈では、「ながらも」は不適切となる。

非難・詰問の意図をもって発話される「働きかけ」の文には(12)のような非明示的なものと明示的なものがあるが、明示的なものについても、「ながらも」を用いるのは不自然である。次の(13)は角田(2004)が、「ながら」は禁止や否定依頼なら「働きかけ」を表せるということを説明するために挙げた、明示的な「働きかけ」の例文を、「ながらも」に差し替えたものである。

- (13) a. *人の気持ちがわかっていながらも、じらすな。
b. *ここまで来ながらも、帰るなんて言わないでください。

禁止・否定依頼以外の「働きかけ」の発話は、どうだろうか。(14)を見てみよう。

- (14) a. ??余計な詮索はするなと言われながらも、一応気にかけておいてくれ。
 b. ??戦況は絶望的だと聞いていながらも、希望を持ち続けよう。

(14)は否定的な文脈ではないが、容認性が低い。また、発話の背景にある状況が同じであっても、「一応気にかけておくことにした」「希望を持ち続ける」など、主節が「働きかけ」の形でなければ許容度は上がる。そのため、禁止・否定依頼以外の「働きかけ」では「ながらも」が使えないのは確かだが、これは文脈とは関わりがなく、話者の感情による影響ではないと思われる。

「働きかけ」の発話の他、次の(15)のような文でも、個人差はありそうだが、「ながらも」は許容しにくい。否定的な感情を表現した文脈では「ながらも」が使いにくい傾向があると言える。

- (15) a. ??平社員という立場にありながらも、彼は出すぎたことをしてしまった。
 b. ??僕も彼女が好きだと知っていながらも、彼は卑怯にも抜け駆けをした。(cf. (8b))

さて、(12)-(13)、(15)は否定的な文脈であり、「ながらも」は使えなかった。一方、肯定的な文脈では「ながらも」は許容される。

- (16) (cf. (5))
 a. 日本チームはライバルである韓国に敗れながらも、2位という好成績を残せてよく頑張った。
 b. 彼は苦学していながらも、東大に見事合格した聡明な青年だ。

(17)のように否定肯定の感情の表れない中立的な文も、問題なく許容する。

- (17) (cf. (1))
 渋谷駅の周辺は、終電間近ながらも大勢の人が行き交っている。

このように、「ながらも」は「くせに」とは逆に、中立的・肯定的な文脈で許容され、否定的な文脈で許容されない逆接助詞である。

3.2. 「ながら」

一般的には「ながら」は「ながらも」とほぼ同じ意味とされている。しかし、非難の文

脈に注目すると、その違いにおいて興味深い傾向が見られる。

まず、「ながら」の用法には逆接と非逆接とがあり、逆接の「ながら」と非逆接の「ながら」とは別種のものとして扱われることが多い。南(1993)では、従属句をその内部構造に現れる成分、要素の範囲により三種に分けているが、「ヨクカキマゼナガラ煮マシヨウ」といった非逆接の「ながら」を伴う従属句はA類、「カラダハ小サイナガラ、チカラハ強イ」といった逆接の「ながら」を伴う従属句はB類としている。C類に含まれるのは、逆接としては「が」「けれど」を伴う従属句である。一般的傾向として、A類の句がもっとも使用頻度が低く、それに対してC類の句はもっとも広く使用される要素であり、B類はその中間であると言われている。

角田(2004)では、逆接の接続助詞について主節との共起に着目した考察がなされており、逆接の「ながら」についても、「にもかかわらず」「のに」「が・けれど」との比較の上で語られている。しかし、「ながらも」については取り立てて言及されておらず、「ながら」とほぼ同様の意味を持つとされてきたようである。確かに(18)のような中立的な文では、「ながらも」は、単純に前後の文内容が矛盾する関係にある意を表す逆接であり、「ながらも」も同様の意味を持っている。

- (18) (cf. (17))
 渋谷駅の周辺は、終電間近ながらも大勢の人が行き交っている。

「くせに」とは異なり、話者の感情の関わりない中立的な文脈だからといって「ながら」や「ながらも」が使用できないということはない。「ながら」を使うか「ながらも」を使うかは任意であり、文意の違いは生じない。

しかし、「ながら」と「ながらも」で、大きく意味が異なる場合もある。非難や詰問など、相手を責めようという、相手に働きかけるような発話意図がはっきりしている場合、両者の容認性の差が顕著に表れてくる。明示的な非難・詰問の文としては、(19)のような禁止・否定依頼文があるが、「ながらも」を許容しなかったのに対して、「ながら」は違和感なく許容する。

- (19) (cf. (13))
 a. 人の気持ちがわかっていながら、じらすな。(角田(2004): 37)
 b. ここまで来ながら、帰るなんて言わないでください。(角田(2004): 38)

なお、(20)のような禁止・否定依頼以外の「働きかけ」では、「ながらも」と同様、許容されない。

(20) (cf. (14))

- a. *余計な詮索はするなと言われながら、一応気にかけておいてくれ。
- b. *戦況は絶望的だと聞いていながら、希望を持ち続けよう。

ただしそれでも、若干「ながらも」のほうが許容しやすそうではある。3.1 節で述べた通り、(14)、(20)の容認性の低さは主に文形式によるものであるが、文脈の影響がゼロであるとも言切れない。

非明示的な非難・詰問の「働きかけ」の文には、(21)のようなものがある。(22)は聞き手に向けた非難や詰問ではないが、否定的な感情を含んだ文である。

(21) (cf. (12))

- a. 君のほうから誘いながら、今さらやめようなどと何を言っているのだ。
- b. 腹痛で学校を早退しながら、どうして遊んでいるんですか。
- c. あの人は肝心なときに黙っていながら、今頃あれこれ口を出されては不愉快だ。

(22) (cf. (15))

- a. 平社員という立場にありながら、彼は出すぎたことをしてしまった。
- b. 僕も彼女が好きだと知っていながら、彼は卑怯にも抜け駆けをした。

(21)、(22)は、「ながらも」であれば許容されない文である。つまり、「ながら」は非難の文脈と関わりが深く、非難の意図がない文脈では、「くせに」と同様、「ながら」の容認性は低まる。

また、「ながら」は「くせに」ほどではないが、単独でも非難のニュアンスを持っているが、「ながらも」にはそれが無い。その証拠に、(23)のような、特に「くせに」に典型的に見られる主節の省略された発話では、「ながら」は使用でき、「ながらも」は使用できない。

- (23) a. 私のことを愛していると言っておきながら。
- b. ??私のことを愛していると言っておきながらも。
- c. 私のことを愛していると言ったくせに。

こうした終助詞的な用法では、逆接助詞によって非難のニュアンスが文脈に付加されない限り、話者が何を言おうとしているのかまるで文意がくみとれなくなってしまう。「が・けれど」を使用した文と比較するとよくわかるだろう。

このように、「ながら」は非難の文脈に馴染みやすいが、「くせに」とは異なり(18)のよ

うな中立的な文でも使用できた。以下、肯定的感情を含む文脈について見てみたい。

(24) (cf. (16a))

??日本チームはライバルである韓国に敗れながら、2位という好成績を残せてよく頑張った。

「ながらも」と違って「ながら」は許容されない。しかし、これだけで肯定的な文脈が「ながら」を許容しにくいとするのは早計である。次の例を見てみよう。

(25) (cf. (24))

- a. ?日本チームは最下位のチームに一度敗北しながら、2位という好成績を残せてよく頑張った。
- b. 日本チームは最下位のチームに一度敗北しながらも、2位という好成績を残せてよく頑張った。

「最下位のチームに負ける」ということは通常否定的な感情を持たれるべき内容であるが、逆に(24)よりも「ながら」「ながらも」の容認性の差は小さくなっている。また、(24)の例文のままでも、「韓国に負けたら当然好成績は残せないはずである」という前提を加えたならば、容認性が上がる。(26)のように、そのチームに負けることと好成績を残せないことの間に関係が薄い状況設定と比べると、その差は顕著である。

(26) (cf. (25))

- a. ??日本チームは優勝したイギリスに敗北しながら、2位という好成績を残せてよく頑張った。
- b. 日本チームは優勝したイギリスに敗北しながらも、2位という好成績を残せてよく頑張った。

(24)-(26)は主節は同じであり、文全体の主旨も肯定的である。違っているのは、従属節と主節の内容がどのくらい相反しているかという点のみである。(27)も肯定的な文脈で、「ながら」が使えないこともない。

(27) ?彼は苦学していながら、東大に見事合格した聡明な青年だ。

この文では従属節から「苦学していたなら難関の東大に通ることは難しい」という推論が導かれ、主節がそれを否定している。

こうしてみると、(24)で「ながら」が使用できなかったのは、話者の肯定的感情のためというよりは、従属節と主文との間に対照の関係はあれどもはっきりした推論の否定等が成立しておらず、矛盾の程度が不足しているためではないかとも考えられる。そうすると、「ながら」は「ながらも」よりも、逆接の程度が大きな文で使用されるということになる。

以上、文脈と「ながら」「ながらも」の選択について整理すると、話者が主観的な感情を持っていないニュートラルな場合は「ながら」「ながらも」の両者が使用可能で、容認性に一定の差異は見いだせない。対象に対して話者が主観的な評価の感情を持っており、それが否定的なものであることが文内容から明らかな場合は、「ながら」を使用し、「ながらも」は許容しにくい。逆に、肯定的な感情が表されている文では、「ながら」より「ながらも」のほうが比較的自然而なるものの、個人によって揺れがある程度であり、「ながら」が使用できないというほどのことはない。また、主節と従属節の矛盾の程度、あるいは逆接の種類などによって「ながら」と「ながらも」の容認性に差が生じるのではないかとも思われるが、趣旨からは外れるので本論では問題としない。

4. 非難の「文脈」

ここまで、話者の否定肯定感情を含んだ文と幾つかの逆接助詞の共起について例文を挙げて観察してきたが、ここでは逆接助詞の選択に制限を与える「話者の否定肯定感情を含んだ文」とは何なのかを考えてみたい。

これまでに挙げた例文と重複するものもあるが、「くせに・ながら」を許容し「ながらも」を許容しない文を、否定的な文として並べてみる。

- (28) a. 人の気持ちがわかっているくせに、じらすな。(=(9c))
b. ここまで来たくせに、帰るなんて言わないでちょうだい。
c. 私のことを愛していると言ったくせに。(=(23c))
d. 腹痛で学校を早退したくせに、どうして遊んでいるんですか。(=(9b))
e. 平社員という立場にあったくせに、彼は出すぎたことをしてしまった。
f. あの人は肝心なときに黙っていたくせに、今頃あれこれ口を出されては不愉快だ。(=(8a))

(28)を形式的な面から見ると、禁止・否定依頼、疑問、完了、そして否定的感情を表す形容詞・形容動詞・動詞を含む文ということになるが、これはまったく適切でない。形式が同じであっても、次の(29)のように「くせに」を使うと不自然になる文もあるからである。

- (29) a. *あなたも大変な問題を抱えているくせに、私などのために無理をなさらない

ください。

- b. *君は今でも十分優秀な成績を修めているくせに、あまり頑張りすぎるな。
c. ??あの子達は年が離れているくせに、どうして遊んでいるんですか。
d. ??山のような仕事を任されたくせに、彼は定時には全て片付けてしまった。

(29)はいずれも、「ながら」も許容しない。(29a,b)は否定依頼・禁止の形をとっているが、話者は聞き手の頑張りや厚意を好ましく思っていると読みとれるし、(29c)は疑問形、(29d)は完了形だが、話者は通常否定的感情をもって発話しないと思われる内容である。このように、発話者に否定的感情がなかったなら、許容する逆接助詞はまったく異なってくる。これらの文を許容するには、話者が嫌味を言っていると解釈するか、前後に文を補って、話者が非難の意図を持って発話しているという文脈を作り上げるかしなければならない。

なお、(28c)(=(23c))のような終助詞的用法は、完全でない文を逆接助詞のニュアンスに依拠した推測で補うことで機能しているため、どのような文内容であっても、「くせに」や「ながら」が使用されていると自然に否定的な文脈として解釈される。(28f)(=(8a))のように、話者の感情を直接的に表す語が主節にある場合は、ほぼ常に話者が否定感情を持っていると受け取れるので、ほぼ常に「くせに」や「ながら」を許容すると考えられる。

もうひとつ整理したいのは、「否定的な文」とはどのようなことかである。普通には肯定的でも中立的でもないマイナスの感情全てということになるだろうが、本論で「否定的」と言っている文脈は、多かれ少なかれ、対象や聞き手に対して攻撃的な部分のある「非難」の文脈である。次の(30a)のように、マイナスの感情を表す文であっても、非難の意図が一切なければ「くせに」は用いにくい。無意思物主語もその一例であった。無意思物の他に、(30b)のように話者自身に対してもあまり使用されない。

- (30) a. ??彼女は今辛い思いをしているくせに、私に頼ってくれなくて悲しい。
b. ??平社員という立場にあったくせに、私は出すぎたことをしてしまった。

このように自分が悲しいからといって相手を買めたりはしない場合もある。また、自分自身を非難するということは、自嘲や自虐を除いてはあまり考えられない。

以上をまとめると、逆接助詞の選択に影響を与えるのは、文法上の特定の形式や文の表意ではなく、発話者の非難の意図だということになる。相手を非難したり問い詰めたりという意図の発話であるかどうか、明示的・非明示的を問わない「非難の文脈・ムード」があるかどうかによって、どの逆接助詞が使えるのかが決まってくるのである。

5. その他の逆接助詞

ここまで、「くせに」「ながら」「ながらも」について観察し、文脈に表れる話者の肯定否定の感情により、選択できる逆接の接続助詞が異なるらしいということがわかってきた。最も否定的な感情を含んでいるのは「くせに」である。そこで本節では、「くせに」と他の逆接の接続助詞がどこまで置換可能かということ調べることににより、各接続助詞がどの程度否定感情を反映するものなのか整理したい。

5.1. 「が」「けれど」「けれども」

「が」は、数ある逆接の接続助詞の中でも最も広い用法を持っており、南(1993)も角田(2004)も、最も多くの成文・要素、あるいはモダリティと共起できるグループにこれらを分類しているが、発話者の感情に注目してみると、必ずしも同様の傾向にならない。なお、「けれど」及び「けれども」については、話者の感情に関して「が」と許容度が違ってくような例は観察されなかったため、以下「が」のみを代表として記述する。

まず、(31)のような非難の発話意図がはっきりしていない、中立的な文脈としても解釈可能な文では、「が」は「くせに」と差し替えることが可能である。

(31) (cf. (2))

- a. 薄給のサラリーマンだが、高い車に乗っている。
- b. あの家の犬は大型犬だが、臆病でよく吠える。

これらの文は、「くせに」を許容する程度には否定的な文脈として解釈可能だが、話者の感情を別とした客観的な事実を述べる文としても受け取れる、幅のある文脈である。そうした文では「が」は使用可能なようである。しかし、2.2.3節で例に挙げたような、非難の発話意図がはっきりした文や、終助詞的用法ではまったく使用できない。ただし、(10)や(11)の文脈においては「前置き」として解釈する場合に限り許容されるが、「あなたは肝心なときに黙っていたが、(そのくせ、それなのに)今頃あれこれ口を出されては不愉快だ」というように、非難の逆接助詞を間に補った解釈となる。「が」が非難のムードと相容れないということは確かなようである。

他方、「くせに」が使えない中立的・肯定的な文で「が」は使用可能である。次の(32)は客観的な状況描写文であり、「くせに」は使えないが、「が」ならば問題ない。

(32) (cf. (1))

渋谷駅の周辺は、終電間近だが大勢の人が行き交っている。

肯定的な文については、2.2.2節の(5)、(6)を参照してほしい。

また、中立的・肯定的な文脈の中でも、禁止・否定依頼以外の「働きかけ」の主節と共起するのは「が」「けれど」系の逆接助詞だけである。なお、第3節で「ながら」と「ながらも」の差異について述べたが、「けれど」と「けれども」にはこのような差異は認められない。

5.2. 「のに」「にもかかわらず」

「のに」「にもかかわらず」はごく近いニュアンスを持っているようである。「くせに」が使える文脈ではほとんどの場合この二つも使える。ただし、「にもかかわらず」は終助詞的な用法の「くせに」とは置き換えが難しい。「のに」は「ながら」と同じく、使用可能である。

(33) (cf. (28c))

- a. 私のことを愛していると言ったのに。
- b. ??私のことを愛していると言ったにもかかわらず。

また、「にもかかわらず」は禁止・否定依頼の文でも、「くせに」の代わりにしにくい。

(34) (cf. (28a))

?人の気持ちがかかっているにもかかわらず、じらすな。

(34)は個人によって許容度の差がありそうで、違和感の多くは「にもかかわらず」が書き言的性質があるために生じていると考えられ、「にもかかわらず」が禁止の働きかけ文に使えないということではない。角田(2004: 42)は「にもかかわらず」は主節が「働きかけ」や「発話行為」の形になるものは一切表せないとしているが、これには異議を唱えたい。もっとも、書き言的であるということもまた、非難という話者の感情を直接的に反映しにくい性質であるとして捉えることもできる。

次に、「くせに」が使えない中立的・肯定的な文脈についてだが、中立的な文脈では「のに」「にもかかわらず」共に使用できる。肯定的な文脈では、(35)の通り、文によって許容したりしなかったりで、どういった文脈なら使えるのかははっきりしない。

- (35) a. 彼は苦学していた{のに/にもかかわらず}、東大に見事合格した聡明な青年だ。(cf. (5b))
- b. ??日本チームは優勝したイギリスに敗北した{のに/にもかかわらず}、2位という好成績を残せてよく頑張った。(cf. (26a))

ただし(35b)も非文というほどではないので、肯定的文脈では使用可能としても良いかもしれない。

5.3. 「つつ」「つつも」

「つつ」「つつも」は、「ながら」「ながらも」と同様、逆接の接続助詞であると同時に並列の接続助詞でもあり、逆接助詞として用いられる際のニュアンスも「ながら」「ながらも」とよく似ている。(36)、(37)に表れているように、非難の発話においては、「ながら」と「ながらも」より微妙な差異ながら、両者の間にあるのと同じような許容度の違いが「つつ」と「つつも」の間にも見られ、否定的な文脈では「つつ」のほうが自然であり、「くせに」と差し替え可能である。「つつも」は「くせに」の代わりにしにくい。

(36) (cf. (22b))

- a. 僕も彼女を好きだと知っていつつ、抜け駆けをするなんて彼は卑怯だ。
- b. ??僕も彼女を好きだと知っていつつも、抜け駆けをするなんて彼は卑怯だ。

(37) (cf. (21b))

- a. 腹痛で学校を早退しつつ、どうして遊んでいるんですか。
- b. ??腹痛で学校を早退しつつも、どうして遊んでいるんですか。

このように、対象に対して話者が主観的な評価の感情を持っており、それが否定的なものであることが文内容から明らかな場合は、「つつ」を使用し、「つつも」は許容しにくい。

ただし書き言葉的な性質があるためか、終助詞的な用法ではどちらも許容されない。

(38) (cf. (28c))

- a. ??私のことを愛していると言っておきつつ。
- b. ??私のことを愛していると言っておきつつも。

(38)はいずれも、「くせに」や「ながら」「のに」を用いた文に比べると、許容度が落ちる。

中立的・肯定的文脈では、「つつ」「つつも」はほぼ同じように使用可能である。

(39) (cf. (5c))

- a. 突然のことで驚きつつ、とても嬉しかった。
- b. 突然のことで驚きつつも、とても嬉しかった。

(39)は多少「つつも」のほうが自然になるが、差異は小さく、肯定的文脈では「つつ」「つつも」どちらも使える。ただし、中立的であっても(40)のように無意思物を対象にとる文では、どちらも違和感がある。

- (40) a. ??このペンは油性でありつつ、滲む。
- b. ??このペンは油性でありつつも、滲む。

また、禁止・否定依頼以外の「働きかけ」の発話は許容しない。こうしたところも、「ながら」「ながらも」と同じである。

5.4. まとめ

以下に 10 種類の逆接助詞と各文脈との関係を図示する。個々の文例や個人差によりばらつきがあるが、おおまかにまとめるとこのようになる。

(41) 否定的（非難）文脈

適

「くせに」

|

「ながら」「のに」

|

「つつ」「にもかかわらず」

|

「ながらも」「つつも」

|

「が」「けれど」「けれども」

不適

(42) 中立的文脈

適

「が」「けれど」「けれども」
| 「ながら」「ながらも」「のに」「にもかかわらず」
|
| 「つつ」「つつも」
|
|
|
|
| 「くせに」

不適

(43) 肯定的文脈

適

「が」「けれど」「けれども」
| 「ながらも」「つつも」
| 「ながら」「つつ」
|
| 「のに」「にもかかわらず」
|
|
| 「くせに」

不適

6. おわりに

以上から、どの逆接の接続助詞を選択するかには発話者の主観的感情が影響し、特に不満・非難を示そうとして発話される文ではそれが顕著である。逆接助詞は非難の感情を反映しうるものと、そうした用法のない、それ以外のものとのゆるやかに二分することができる。

「くせに」はそれ自体に単独でも非難の意味合いがあり、最もはっきりと非難の意図を反映すると言える。次に、「ながら」「のに」「にも関わらず」「つつ」が、非難の意図と共に用いられ、中でも「ながら」「のに」は終助詞的用法が見られることから、「くせに」に準じて話者の感情を反映しやすいと思われる。それに対し、「ながらも」「つつも」「が」「けれど」「けれども」は非難の文脈とは共起しにくい。

このように、「ながら」「ながらも」の差異についても、肯定的な文脈においては曖昧だが、否定的な文脈、特に禁止や非難の働きかけの意図が明らかな主節を含む文においては、「ながら」のほうが容認性が高いことが観察された。「つつ」「つつも」にも、より微妙ではあるが同様の傾向が見受けられる。一方、「けれど」「けれども」については、そのような容認性の違いは観察されなかったが、「けれど」はもともと、「ながら」「つつ」とは異なり非難の意図を持つ発話とは相容れない。「ながら」「つつ」は非難の意図を反映しやすいが、そこに「も」が付け加わることにより、非難の意図を反映できなくなるものと考えられる。「ながら」と「ながらも」、及び「つつ」と「つつも」を、常に同一の接続助詞として扱うことは不適切だと言える。

最後に、本論では触れなかった問題として、「ながら」の前置きの解釈がある。本論では区別せずに例文に合わせて用いたが、厳密には「ながら」には接続助詞としての用法と副助詞的な用法との二つがあり、「用言+ながら」は前者、「体言+ながら」は後者である。この二つの用法の間にも、非難の文脈と関係したニュアンスの違いがある。次の(44)では、中立的な文脈で「体言+ながら」が許容される一方で、「用言+ながら」が許容されない。

(44) (cf. (18))

??渋谷駅の周辺は、終電間近でありながら大勢の人が行き交っている。

(44)は「くせに」と同じように、話者の非難の意図を補完するような文脈を付け加えれば許容される。

また、「体言+ながら」には終助詞的用法がない。

(45) ??あなたは小学校の教師ながら。

cf. あなたは小学校の教師でありながら。

(45)は非難の解釈ができないため、主節が推測できず、文意が不明になってしまっている。さらに、「体言+ながら」は禁止・否定依頼以外の、非難のムードでない「働きかけ」の主節とも共起する。

(46) 戦況は絶望的ながら、希望を持ち続けよう。

cf. *戦況は絶望的だと聞いていながら (戦況は絶望的でありながら)、希望を持ち続けよう。

「体言+ながら」は、「が」などと同じく前置きの意味合いに解釈しやすいため、(46)で許容されるものと思われる。また、「用言+ながら」は「体言+ながら」よりも非難の文脈と

共に使われやすいようである。もちろん、第 3 節で見た通り、「用言 + ながら」の形で非難の文脈が必ず生まれるというわけではないが、特に「～でありながら」「～していながら」「～しておきながら」等、状態性の強い補助動詞を伴った場合、非難の意味合いが強くなる。

- (47) a. ??腹痛で学校を早退しながら。
b. 腹痛で学校を早退していながら。

(47a)は「用言 + ながら」だが、状態動詞を伴った(47b)に比べて容認性が低い。

状態動詞に接続する場合と普通動詞に接続する場合の違いを考えると、並列的な解釈が可能かどうかということがあるので、このニュアンスの差は「ながら」に並列的用法があるせいではないかと思われる。非難のムードと共に用いられるのはあくまで逆接の「ながら」であり、並列や、前置きの用法の「ながら」ではないのだろう。

参考文献

- 金水敏・今仁生美（2003）『現代言語学入門4 意味と文脈』岩波書店
益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法 - 改訂版 - 』くろしお出版
南不二男（1993）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
角田三枝（2004）『日本語の節・文の接続とモダリティ』くろしお出版
梅原恭則（1989）「助詞の構文的機能」『講座日本語と日本語教育 4 日本語の文法・文体（上）』北原保雄 編 明治書院